

平成 30 年 2 月 3 日(土)に日本臨床発達心理士会茨城支部  
「平成 29 年度 第 1 回公開講座・第 2 回資格更新研修会」が行われました。

- 1 場所：茨城県南生涯学習センター
- 1 研修：「身体的不器用さへの支援の必要性と可能性」  
～ DCD（発達性協調運動障害）の観点から～  
講師 澤江 幸則 先生（筑波大学 体育系准教授）
- 3 参加者 79 人（会員 29 名，一般 50 名）

#### 4 研修内容

- DCD という側面からの運動の困難さ
  - ・発達性協調運動障害の子どもたち
  - ・DCD の定義，有症率，日常生活について
- 基本障害特性からみた運動の困難さ
  - ・困難が続くと運動の時間が嫌になる
  - ・ADHD・ASD の特性を理解して対応を考える
- 運動発達を理解する
  - ・様々な運動発達モデル（Gallahue の運動発達モデル他）
  - ・ゴールデンエイジ（9～10 歳：指導をよく吸収する時期）
  - ・プレゴールデンエイジ（6～8 歳：動きの多様性が育つ時期）
- アダプテーションを実践する
  - ・具体的に伝える：手をまっすぐあげさせるために「天井のライトが触れるかな」
  - ・介助よりは子ども自ら動くことが重要：ハイタッチ等を活用し動きを誘発するとよい
  - ・どれだけ運動を分解して伝えるかが重要
  - ・目標，結果，課題の明確化（構造化）
- 課題指向型アプローチ
  - ・子どもたちが目の前にある課題を自発的に楽しめるか  
その手立てを考え，用意する
  - ・どんな動きをさせるためにどんなアプローチをするか
- つくば MDC の取り組み
  - ・レジャースキル開発プログラム（おとな MDC）
  - ・運動発達支援プログラム（こども MDC）
  - ・M-ABC2 得点の変化
  - ・発達を見ていく上で運動が大切であること
  - ・発達の中のパートナーとして運動があること
  - ・不器用といわれる子どもとの出会いからの指導の語り
  - ・協調運動の困難とは 協調運動することの難しさ
  - ・今の状態をどう認めてあげるか

など，運動の困難さを抱える子供たちの世界や，  
どのようにしていくことで気持ちをのせ，できるようにさせていくか，  
具体的な事例を数多く伺うことができました。  
セスチャーを交えた説明，表現がとても分かりやすく，  
楽しく，有意義な時間となりました。

\*\*\*\*\*  
来年度も，ニーズに応じた研修会，事例検討会を実施していきます。  
随時ご案内していきますので，ぜひご参加ください。お待ちしております。  
文責 河村 要和

\*\*\*\*\*